
とある科学の双瞳の幻～ハルシネーション～

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の双瞳の幻々ハルシネーション

【Nコード】

N9182L

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

10年前突然いなくなった母親を探すため、2度目の学園都市生活もすでに4年目になり、一ノ瀬煌いちのせのきらもすでに中学3年。まだ掴めぬ母親の足取りを探すうちに、自分の出生の秘密を……。

別作品の幻曲奏者に出てくるキャラの話です。

本編にはまだでてきてないけれど、関わらせた話にしようと思いません。

不定期更新ですが、未永くご愛読いただければうれしいです。

K 1 記憶

いつの事だろう・・・
声が頭に響く・・・

「あなた・・・本当によかったんですか」

「もちろんだよ」

「でも・・・きつと私は」

「それでもいい。私は君を愛しているんだから」

「私もよ・・・でもきつとこの子が大きくなるまでは」

「大丈夫。私がきちんと育てる。そしていつか・・・この子を君に会
わせに」

「ほんとう・・・とてもうれしいわ・・・」

「名前・・・名前は」

「決めたわ・・・」

「教えて、どんな名前なんだい」

「この子は」

「最悪だ」

よくわからない夢のせいで、気分が優れない。ベットから起き上がリキッチンへ向かう。冷蔵庫からプラスチック容器に入った麦茶をコップへ注ぐ。ごくりと勢いよく飲み干し、寝汗をかいて水分を失った体に潤いを補給する。一息ついたところで電子レンジについた時計に目をやる。

「はぁ・・・新学年早々お説教か」

今年中学3年を迎える彼は、明らかに登校時間よりも1時間遅れで学校へ向かった。

子供の頃、6歳まで学園都市で両親と住んでいた彼だったが、とある理由で小学校時代は学園都市外で生活していた。別に誰が悪いわけでも、感情なんてそんなもんだと今では半ば強引に理解できるのだが、子供の時には理解不能な事もある。母親がある日突然消えた。なんの前触れもなく。子供だったから泣きじゃくった記憶がある。まだ5歳・・・母親が恋しい時に・・・。父親はまるで何かを悟ったようにこの学園を去ることを決めた。幾日も待ち、引越しの日もまったが母親は現れなかった。引越した場所では良いことも悪いこともあった。片親・・・それが世間というやつ目の目には厳しく映るのだろう。ましてやまだ5歳の子供をつれて父一人。子供がいじめる格好の存在。だけど昔からケンカに負けたことはない。怪我をしても友達よりも治りが少し早い、って理由で気味悪がられたり。

父親は研究者で、母親と出会ったときは学園都市に招かれて滞在し

ていたらしい。その後も学園都市統括理事会の許可を得て、学園都市の外での研究も許されたらしい。らしいというのは、すべて父親から聞いたわけではない。なんとなく察する部分と父親のあらゆるメモをのぞいた。パソコンのデータも。父親に母親の話をするとき切悲しい表情もせずうれしそうに楽しそうに俺の頭を撫でながら、母親の事を語り出す。そのときの父親の笑顔はとても優しいものだと感じた。

「来月から学園都市に行きなさい」

突然父親に言われたのは小学校6年の時だった。クラスのガキ大将的なやつらにケンカを吹っかけられた際に、全員をなんらかの精神異常状態にしてしまった。当然非難は父親へと向けられる。ただただ頭を下げる父親だったが、自宅で学園都市への引越し準備をしながら、父親はその事を嬉々として自慢げな顔をしていた。

「お前は生まれながらに超能力を持っている。お母さんもそうだった」

「超能力？」

「そう・・・お前の力はお母さんからの贈り物だよ」

「お母さんも僕と同じこれを？」

「お母さんの能力とは違う。けれど超能力を持っているのは、やはりお母さんの影響だよ」

「お母さん」

「お母さんに会いたいかい？」

その言葉に対する応えに迷いはなかった。

「お母さんに会いたい」

「ならお母さんは学園都市にいる。きつと・・・お前なら会えるさ」
その時父親の携帯がなった。すぐに出た父親は、

「わかりました。ええ・・・あとの事はお願いします」

そういつて電話を切った父親は、「仕事が入った」と言った。

「この後くる女性と一緒に学園都市へ行きなさい」

「お父さんは？」

「お父さんは一緒には行けないんだよ」

その後は何を話したか覚えていない。いつの間には学園都市の生活にもなれたせいなのか、学園都市に戻ってきた後の記憶がぼやけていて思い出せない。

「あー、まだ式の途中か・・・何組だろう」

とりあえず教室で待つことにした。もちろん担任に呼び出されて叱られたのは言うまでもない。

K2 再会（前書き）

ちよつと行き当たりばったりなのですが、
本編をどうぞー

K 2 再会

「たはは」

こつてり絞られた煌はがっくりと肩を落とし、始業式が終わってだいぶ経つての解放に気分は憂鬱であった。校内はほとんど生徒も帰宅していて閑散としている。下駄箱で靴に履き替えふと外を見ると、見慣れた感じの後ろ姿がある。

(あいつ・・・元気にやっているといいけど)

黒髪のロングヘアに白梅の髪飾りの少女がゆっくりと校門へ向かっていく。

4年前学園都市に来て第13学区の小学校に通っていた頃、家が近いということで、登下校を一緒にしていた女の子を思い出した。転入してきた学校では前の学校と違い、能力者がいる事もありオツドアイの眼の事や家族の事でバカにされることはなかった。初めての身体検査では能力名は幻覚催眠、総合評価はレベル3とされた。

「煌、俺今日は先に帰るからな」

そういつていつも良く帰る友達が、ポン肩を叩いて教室から飛び出していった。よくよく聞いてみると母親が今日会いに来ているらしい。いつも以上に笑顔だった彼を思い出し納得できた。自分にはいない、でも記憶にある母親を思い出しいつか再開できるように、と改めて心に誓った。日も傾き始め、校庭では帰宅前に友達と遊ぶ子や集団で帰宅する子供達が見て取れる。

「さて、帰ろつと」

急に暇になったので、家に帰って晩御飯を何にしようかと思考をかべた。学園都市はほとんどが親元から離れ、こちらで一人暮らしをしている。小学生までは食堂でご飯をだしてくれる寮もあるのだが、煌は父親の知り合いの女性の家で暮らしている。しかも女性は仕事に忙しいらしく、ほとんど会わないため食事は自分で作らなければならなかった。もともと母親がいない生活をしてきたため家事などはわりと出来るくらいは器用である。ランドセルからスーパールのチラシを取り出し、今日の安売りのチェックを始める。

「うーん、やっぱり牛乳は朝比奈ミルク」

そんな事を思いつつスーパーへ歩いていると、なにやら罵声が耳に入ってくる。同じくランドセルを背負った少女が3人の高校生くらいの男に囲まれている。そのうち一人はなにか手に持っており、少女はその一人に泣いて何かを言っている。近づくとつれ話が聞こえてくるとお守りを返してと叫んでいる。男達は大したことない理由で少女に絡んでいる。目的は察するにカツアゲといった所だ。

「おまもり返してください」

少女の必死な叫びも男達はへらへらと笑っている。

「返してあげなよ」

振り向いた男達は声をかけてきたのが、同じ小学生だと知って小馬鹿にするような笑みを浮かべる。あぁんと凄みをきかせたいのか、小学生に対して三人で睨んでくる。

「なんだあこのガキは」

「おめえには関係ねえ、すっこんでろ」

小学生に対して容赦なく蹴りを放つ。通常の小学生がかなうはずはない。

「げほつごほ・・・ぐっ」

防御する暇もなく腹に直撃したため、咳き込むと共に逆流してきた何かを必死で送り返す。

「やめてください。この子は関係ないんです」

「うるせえ」

裏手で少女の頬をはたき飛ばす。頬を赤くはらせ嗚咽を漏らしながら地面に染みを作る。この時間は人通りは少なく、警備員の警戒が他の学区より強くても今は通りかかる可能性は少ない。

「まったく・・・」

パンパンと服についた砂を落とし、少女の方へ近寄る。涙を溢れさせたただただ泣く少女に、大丈夫だよと小さく伝える。え？という声と共に少女は煌を見上げる。その背中は小さいが、今の少女にとっては大きく見えたのかもしれない。

「おうおう、かつこいいねえ」

三人は煌を見下ろしてくる。

「幻覚ゆめでもみてる」

そういつて三人を見る煌の目は、紫電の輝きを帯びていた。

「うわ・・・やだ・・・ぎゃあああ」

「返すから・・・う・・・うわああ」

「やめてくれええええ」

そういつて三人は走り去っていった。ぽとりと地面に落とされたお守りを拾い少女へ渡した。

「あの・・・ありがとう」

そういつた少女は、とてもかわいい笑顔を浮かべた。その後話をしていくうちに、同じ学校で2学年下の4年生。家も近い事がわかり、それから一緒に登下校するようになった。

その少女がつけていたのが白梅の髪飾り。今日の前を歩いている少女も同じ・・・いや似たような髪飾りをつけているため、ふいにその事を思い出していた。

「なんて言っただけなあ・・・さ・・・さ・・・てん」

うーむと唸りつつ彼女の後ろを歩く。変に歩幅が同じなため端から

みたらストーカーというか、気持ち悪がられても仕方がないような
感じを漂わせていた。

「佐天・・・涙子？」

ぼそつと名前を呟いた途端、目の前の少女が立ち止まり煌の方へ振
り向いた。

「はい？」

「え？え・・・と」

あまりの予想外の出来事にしどろもどろにパニックしていると、少女
が近づいてくる。

「こ、煌ちゃん？」

「涙子・・・」

「煌ちゃん」

にこつと笑った彼女は、あの時と同じ・・・とてもかわいい笑顔だ
った。

K 2 再会（後書き）

ぬああああ、書いてて恥ずかしい。

だめだ・・・もっとうまく・・・うまく書きたい。

てなわけで佐天フラグでも立てて見ようかと・・・

S 3 拉致（前書き）

まったり更新してます本作品。

やっと三話目を執筆できました。

佐天大好き、佐天推ししていこうかと（笑）

では本編どうぞ

S 3 拉致

「おーい、煌ちゃん」
「ん？」

学校の廊下を歩いていたら煌は、少女の呼びかけに振り返る。胸元で教科書を抱えた少女は小走り気味に廊下を走ってくる。

「なんだ涙子か」
「なんだとはひどいなあ」

そう言っつて少し頬を膨らました彼女は、煌の隣に並んで歩き始める。
「もう慣れたか？」

あはは、と乾いた笑いを浮かべた。小学校から中学校にあがるとい
る環境も変わるため、まだ馴染めてないらしい。自分も同じ経
験をしているから、最初はそんなもんだなどと当たり障りの無い返
答をした。

「あ、あのね煌ちゃん」
佐天は少し表情を強張らせ視線を下に向けた。先ほどまで目を合わ
せて話していた涙子のその表情に、これからくる内容はあまりよ
くない物だなとなんとなく察した。

「ん、んーん。なんでもない・・・それじゃ、あたし行くね」
そう言っつていつもの涙子の笑顔で、手を振りながら小走りに去って
行った。

(やつぱり・・・聞けないや)
そう思いながら教室へ戻ると仲良くなったクラスメイトが駆け寄っ
てきた。

「るーいこ、どうだった？噂は本当だった？」
前髪をピン止めた少女が涙子にずっと寄る。

「あけみ近い近い」
あはは、といいながら上体を引かせるも目は輝いている。
「少し落ち着きなよ」

跳ね毛の少女はあけみの肩に手を置く。

「そうだよ。むーちゃんの言うとおり」

長い髪を後ろで二つ縛り、中学1年にしては発育のいいスタイルの少女もあけみを宥める。

「まこちゃんもむーちゃんも気にならないの」

「やっぱり聞けないよ……。そーいうのはやっぱり」

「そっかあ、一ノ瀬先輩の噂……」

「ほんとかなあ？見た感じすっごい悪って感じしないけど」

「スキルアウトだったかはわかりませんが、半年くらい前は紫電の王と呼ばれてた見たいですね」

造花の花飾りをつけた少女は小型端末を操作しながら、煌についての情報を読み上げていく。

「お、さすが初春。頼りになりますなあ」

あけみは初春の前で手もみをしつつ、次の言葉を待った。しかし夕イミング悪くチャイムが鳴り、残念そうに席についた。

「でも珍しいですね。こういうの好きな佐天さんが、興味をしめさないなんて」

「うん……。なんか……。ね」

少し憂いを帯びた表情を浮かべたが、教室のドアが教師によって開かれた事で、初春はそれに気づく事なく姿勢を前へ向けた。

(煌ちゃんは……。煌ちゃん……。だよね?)

この日最後のチャイムが校内へ響く。HRが終了し一斉に生徒が教室から廊下へ溢れ変える。帰宅する生徒に部活する生徒など様々だ。机の横に掛けた鞆を机の上に置き、教科書等を鞆にしまう涙子のまわりに、いつもの三人組が集まる。

「ねー涙子に飾利、この後暇？買い物行かない？」

「いいね、初春も行こうよ」

そう言つて初春の背中を小突く。

「行きたいんですけど、今日はこれから風紀委員のお仕事があるの
で」

はあ、と残念そうに息をはいた。

「またねー」

そう言つて四人は初春を送り出し、一般標準的な雰囲気と価格の『
Seventh mist』へ向かった。

『Seventh mist』は複数階からなる洋服屋で、多数の
チーン店のお店が入っている。お嬢様向けの高級な感じではなく、
一般的に求め安い価格となっている。学生から社会人、子供等幅広
い購入層で、休日等お客の入りは多く、やはり平日は学生の割合が
多い。能力レベルによって支給される奨学金が決まっており、能力
が低い学生達にはありがたい店である。

「ね、ねえ・・・あそこ」

あけみが指差した先には、制服を着た少女を数人の男が囲っている。
何か女の子が言っているが、そのまま路地へ連れ込まれている。

「ねえ、やばくない？」

「ジャ、ジャケット風紀委員に連絡しないと」

あけみは携帯を取り出し、風紀委員への緊急連絡先の番号を急いで
打ち込む。

「とめなきゃ」

風紀委員が駆けつけるまでの時間、最悪の事態を想像し無心で涙子
は走り出した。あけみ達が止める前に。

「ちょ、涙子」

「なあに、ちょっと遊ぼうっていってるだけじゃん」

「いや・・・」

詰め寄る男達に、震える体を建物の壁に預けなんとか姿勢を保っている。恐怖に顔を強張らせ自分を困う男の顔が妙に鮮明に視界を支配する。その内の1人が肩に手を伸ばしてくる。その手を震えながら払い拒む。

「こいつ」

その行為に腹を立てた男は、右手の甲で少女の頬を叩き少女は地面に倒れる。右頬が赤く腫れ涙を流す少女の瞳が、思考が最悪の絶望への事ばかり巡ってしまう。

「やめなさいよ」

少女の目に映るのは、路地の入り口に立つ自分よりも幼さの残る少女。同じように震える足、下に向けた視線、それでも少女はこの場所へ。

「あん？」

入り口に立つ少女の元へふらふらと男が寄っていく。男は少女が震えているのを確認しわざとそれを増徴させるように大きな声を上げる。視線が泳ぐ少女の手を強引にひっぱり路地の奥へと引っ張る。

「や、やだ・・・やめ」

「おらあ」

強引に掴んだ手を振り話、止めに入った彼女も倒れている少女の近くへ投げ飛ばされる。

「きゃっ」

倒れた痛みより、今は隣の少女を確認する。震えながら泣いている彼女を見て、無事でよかったと思ったのもつかの間、自分も同じような立場に立っていると認識を改める。男が自分の足元へ寄ってくる。彼女は必死に拒む。鞆についたお守りを握りしめながら・・・。

S 3 拉致（後書き）

こんな感じですよ。

時系列的に日にちがわかれば明記したいのですが、原作しらないので記載なしですが、時期的には初春と佐天が美琴と会う前の話です。

原作やアニメに違和感無い様にしようと思います。

S 4 勇気の対価（前書き）

第4話目です。

佐天さんをたっぷりかわいがろうと思います。

それでは本編どうぞ

S 4 勇気の対価

「ちよ・・・ちよつと涙子を」

「う、うん。風紀委員にも連絡を・・・」

「あけみとむーちゃんは風紀委員に。私も止めに」

「だめだよまこ」

後ろで二つ縛りにした少女の手をあけみが掴むと同時に、黒いバンタイプの車が路地の入り口に着けられる。路地から出てきた男が後部座席の扉を開け、助手席に乗る。開けられた後部座席に嫌がる少女二人を無理やり歩かせ後部座席に押し入れる。

「ちよ・・・や・・・」

「きゃ」

涙子ともう一人の少女を無理やり押し込むと、勢いよく車が発信させる。

「涙子お」

「はやく繋がって・・・えつと車のナン」

その時あけみの肩に手が掛けられる。びくりと肩をすくめ、恐る恐る振り返る。先程の男の仲間、その可能性も少なくないと顔を強張らせ、恐怖が徐々に支配する。

「い、一ノ瀬先輩？」

少なからず一方的に知っている人物に驚きと安堵が同時に押し寄せた。はあ、と息を吐き体の硬直を解く。

「あれに涙子・・・乗ってたよね」

「は、はい」

黒い噂のある煌に対し、少なからず萎縮しているあけみの声は上ずっていた。そして初めて間近で見る目、少なからず鋭く尖った印象をあけみは感じた。

「大丈夫。涙子達は助けるから」

そういつて二人の少女をぼんぼんと軽く叩き、携帯を取り出した。

電話帳で目的の人物の番号へ。

「サイジヨウさん、見つけましたよ。黒いバン……。はい、はい。ナンバーは間違いないです。夏菜実ちゃんの招集もお願いしますよ。わかりました。それじゃ」

そう言つて電話を切つた煌は、二人に向け笑顔で手を振り、車の向かつた方向へ走り出した。

「へっへっへ、こいつ中学生なのにずいぶんマセた下着だな」

「や、ヤダ。離して」

車内で複数の男に囲まれている涙子と少女。涙子は後ろ手に男に拘束され、隣に座っている男にスカートをめくられている。抵抗しようにも手がふさがっているため抵抗できない。

「さつてと、何がでるかあなつと」

一人の男が涙子の鞆を漁り始める。

「や、やめて・・・キヤ」

パシ、と黙らせるために強めに頬を叩く。

「うるせえな・・・お前は俺たちのおもちやになるんだから・・・な

！！

「お、生徒手帳はっけーん」

ヒュウと口を鳴らしペラペラとめくつて行く。

「佐天・・・涙子ちゃん。わお、今年中学になつたばかりの1年生だつて」

「お前のタイプじゃないか？」

涙子の隣の男が運転席の男へ振る。ああ、と嬉しそうな卑しい笑みを浮かべて笑う。

「こんなガキの何がいいのかねえ。えつと柵が・・・わ」

「な、なんだと・・・柵川中学だと・・・」

助手席の男が驚いたように叫ぶ。その表情は強張り少し血の気が引

いたような顔色。

「なんだよ・・柵川になんかあんのか？」

他の男達はその表情に気づいてないのか、ヘラヘラとからかう様に笑っている。

「や・・やばい・・」

バシィッと運転手の男は助手席の男の頭を叩く。それでも助手席の男は一点を見つめぶつぶつと言葉を止めない。

「さ、サイジョウが・・サイジョウがくる」

「サイジョウだと！！」

車内の男達がそろえて声をあげた。額に汗を浮かべるもの、喉を鳴らすもの。

「ば、バレやしねえって。こいつがここにいるの知らねえんだし」
キキーとブレーキ音を鳴らし、たまり場になっている廃れたマンションの敷地内に停車させる。いそいそと全員が車から降り建物内へ向かおうとしている背後から男の声が発せられた。

「連続婦女暴行の犯行グループだな？」

学制服を着て薄いサングラスを掛けた少年が男達の方へゆっくりと歩いて近づく。

「お前何者だ。ガキはとつと帰んな」

「煌ちゃん・・だめえ」

「はいはい。涙子は大人しく目を瞑ってなさい」

「?・・危な」

「いいから瞑ってろ」

涙子の言葉を鋭い口調の煌の言葉で遮る。今まで聞いた事無い強い口調に涙子は言葉を飲み込む。煌はサングラスをはずし胸ポケットに挿す。双方の色が違う独特なオッドアイの瞳。

「仲間はいないようね」

建物の中から聞こえる女性の声に視線が、建物の入り口に集中する。

「ガッ」

その好きに涙子を掴んでいた男を背後から強襲する。涙子を抱き寄

せつつ、隣の男も蹴り飛ばす。

「てめ・・・ぐあっ」

視線が前後に忙しい男達は、今度は背後の人物に首元目掛けたハイキックで気絶させられる。建物から出てきた彼女はセミロングの赤い髪が印象的で、鋭い目つきで男を威圧する。すかさず怯んだ男からもう一人の少女引き寄せ、赤黒く光を纏った右手を男の前に突き出し

「吹き飛ばへ」

ドンという音と同時に右の掌から発せられた衝撃が空間を振動させ、その反動で男は後方へと弾き飛んだ。

「ぐ・・・紅蓮の女王・・・」

そう呼ばれた彼女は手の甲で横髪を外に払う。

「てことは・・・こっちの男は」

吹き飛ばされた男以外の全員が、煌の方に視線を向ける。

「ふははは、幻覚ゆめに溺れる」

彼らが次の言葉を発する事無く、煌の紫電の瞳に魅入れられそのまま落ちた。

「こいつ、送ってくから後はサイジヨウさんよろしく。その子のカウンセリングもしてあるし、たぶん傷も少しは浅いはず」

落ちた男たちを車の周りに集め、赤い髪の少女へあとの事を任す。

「わかった。あとは私がやっておく」

「ほら涙子・・・いくぞ」

「え？あ、ありがとございました」

涙子は赤い髪の女性に一言お礼し、先を歩いている煌の背中を追いかけた。

「待ってよ煌ちゃん」

「はいはい」

そういつて立ち止まった煌が差し出した右手に、左手を合わせる。あの頃の一緒にいた日々と同じように。

「あの・・煌ちゃん」

「ん？」

急に手が引つ張られた感じになり振り替えると涙子が立ち止まっている。

「どうしっ」

涙子が煌に抱きつき体を震わせる。手を背中に回し指に力が入る。

「怖かったよ・・煌ちゃん」

溜めてたもの、堪えてたものを全て吐き出すように、煌の胸の中で声を漏らす。それをただ抱きしめ頭を優しく撫でる。

「よく頑張ったな涙子。お前があの子を助けたんだ。よしよし」

しばらく泣き続けた涙子は、落ち着いてからこの状況を認識し慌てて離れる。

「えと・・ごめん」

「なにが？ほら友達が待ってるぞ」

「え・・あ、うん・・はあ」

「ほら」

そうしてまた、あの頃のように差し出された手を繋ぎ二人は歩き出した。

S 4 勇気の対価（後書き）

こんなオチですいません。

後日談はあえて書かないことに（笑）

まだ佐天は中1ですから。

てなわけで次回は今回のフラグ？をばっさり無視して、進めます（笑）

S 5 刀匠（前書き）

前回の佐天のフラグブレイカーかまして、いきなり関係ない話ですの。

それでは5話へはりきってどづじょー

まだ春の香りを残しながらも徐々に夏の姿がちらちら見えてくる時期。涙子を助けた婦女暴行事件後から、涙子の反応に少しぎこちなさを感じる。たいがい一緒に帰る時もあるのだが、今週は1度も帰ってない。話しかけても早口で表情も堅く、目も会わせない。ほほも赤らんでいるのを見ると、

（ああ・・・コレが強制フラグってやつか）

などと考えつつ、一人で帰り道を歩く。ふいに1年前のこのくらいの季節の事を思い出す。あの時も一人で帰り道を歩いていた・・・。そう、自分という存在を初めて知ったあの日を・・・

「ねえ・・・そのあなた」

学校帰りのんきに欠伸でも死ながら、ぼけーっとしていた煌は不意に現れた少女から声をかけられる。ふわりと舞い降りるかのように現れた彼女を前にして、周囲を見回す。

（どこかから降りれんのか）

そんなのんきに構えていると、ピシピシと飛んできた殺気が煌の頬を挿す。

「あなた、柵川中学2年の・・・一ノ瀬煌？」

自分が見知らぬ人物から、自分の名前を呼ばれる事に少しいらいらしつつ彼女の姿を正面に捉える。彼女の目は見つけた喜びも、初対面のとまどいもなくただ敵意だけをその瞳に乗せて。だが煌はそれに乗る事無く眠たそうな表情で少女を見やる。

「スレンダーな体・・・胸はその通りないに等しく・・・足はミニスカートからのぞいていて」

「ちよっと、考えてることがダダ漏れよ」

顔を真っ赤にして抗議の声をあげる。

「もういい・・・死んで」

目の前にいた少女の声が背後から聞こえる。足音がかすかに聞こえたので、瞬時に能力ではなく彼女の身体能力と判断する。ならば能力は別にあると仮定しそれもあわせてカバーするようにステップを踏み相手の方へ振り向く。

「あなた・・・風斬氷華について知ってどうするのかしら？」

そういつてポニーテールの少女は、握り締めた右手の人差し指と親指のある方を左の掌にくつつける。

「何の事だ？俺は知らねえよ」

「じゃああなたは・・・たびたびに霧ヶ丘女学院周辺現れて何を調べているの？」

「さあな・・・」

「もういいわ・・・」

そう言うのと今までくつつけていた手を左右に離す。先ほどまで確かに存在していなかったソレが手と手の間を繋ぐ。左手を振りぬき現れたのは刀。ただ人振りの刀を構え、彼女は煌へ突進する。迷いの無い踏み込みとまっすぐなまでの一閃突き。右手の突きを左側に半身をずらし避ける。

「な」

次に目に入って来たのは、腕から横に伸びた刃。膝を地面につけ上体をそらし、寸前で刃を避ける。その伸ばした右手に握った左手をくつつけ刃を抜き出す。

「そんなのありか」

「ソードタンサー 刀匠・・・あなたを刻み付ける女の名前よ」

「そりゃ、名前じゃなくて能力名だろう・・・が」

体のいたるところから刃を生やし、さらに抜き出し本来の刀での戦い方の隙を見えなくさせる。そして自在に消し自分の動きに支障がなく、また自分の体の動きに間合いを熟知している。

「にやろう・・・」

この場に白い糸が舞う。正体は彼女の刃をかわす際に刻まれたワイシャツの残骸。

「ごめんなさい。私・・・普通とは違うの」

そういつてさらに彼女は速度を上げる。体を回転させる動きをつけ煌への間合いを執拗に詰める。一定以上空けさせず彼女は舞う。

「観念な・きや」

スパン、と彼女が気づく間もなく放たれた右手の裏拳が、彼女の右頬に衝撃を走らせ体が横へ流れる。

「え・・・」

煌はその隙に両手を押さえ、軸足をひっかけ彼女を仰向けに倒す。

左腕を左足で押さえ、右腕を右膝で押さえる。左手で彼女のあごを掴み、顔を無理やり向けさせる。

「く・・・」

「答える・・・風斬氷華とはなんだ」

「ぐ・・・」

左手を離し右手で首を締め上げる。めきめきとしめあげ、彼女の首筋に血管が浮かび上がる。苦痛の表情で呼吸を使用と口がガクガク動く。

「げっほっげほごほ」

右手を離すと彼女は大きく咳き込み息を吸いこむ。目からは涙が流れ赤くなっている。

「もう・・・邪魔をするな」

そう言つて彼女から足を離す。紫電の瞳で彼女の瞳と視線を交差させる。

「なに・・・を・・・うぐああああ」

「いい幻覚ゆめを」

（風斬氷華、やっぱり父さんの仕事と・・・何か関係があるのかな。

母さん・・・父さん・・・未だ手がかりなんて見つけれられて無いけど。毎日母さんの写真を見せくれた父さん、必ず母さんを見つけ出すよ)

「私がかつているのは、あなたのお父さんがコレを作成したって事だけ」

そういつて学園都市で身を寄せている女性から、一つの資料を手渡された。その中身を見たのは中学に入りたてで、そこに書いてある事は理解し難い内容だった。女性はその資料以外の事は何も知らな
いらしく、自分で何度も資料を片手に読み続け、AIM拡散力場の
可能性と影響、虚数学区、風斬氷華、そして人間を越える為の実験
対象^{ブル}・・・『Heresy Child』という単語に辿り着いた。
調べていくと風斬氷華という人物が実在し、霧女に在籍している事
を知ることになった。

S 5 刀匠（後書き）

てな感じで、ちょびつとバトルテイストを入れて見ました。

これからなんとなくなあく煌の秘密を書きつつ、日常生活も書きつつ。

まあボチボチやりますので、応援してもらえると嬉しいかも。

S 6 侵入者と守護人（前書き）

はい、6話目です。

進展はのんびりです。

S 6 侵入者と守護人

日が沈み、月が夜空にほんのり明るく光、もうしわけなさそうに大地を照らす。辺りはすっかり静まり返り道を歩く人影を探すのが難しいほど。学園都市は全部で23の学区に分けられている。その中で能力開発関連のトップが集う第18学区。第18学区のとある学校の敷地内で対峙する二人の人影。ただその人影は、対峙するのがこれで……。

「2回目……ね」

胸元まである長い髪を一房で後ろにまとめた人影が、もう一つの人影へ向けて言葉を発する。目を鋭くさせ相手に対して威嚇する。少女とは思えない程の殺意をみなぎらせ、相手を威嚇する。その相手はそれの動じる事無く、にやりと歪んだ笑みを浮かべる。両指をゴキッと鳴らしゆっくりと歩みを進める。

「この時間にお前がいると言う事は……、当たり……ってことだな」

「さあ……何の事が……」

彼女の能力……ソードダンサー刀匠の力で、両手を握り締めた人差し指と親指側、第1と2中手骨側に刃を生やす。

「一昨日とは違う……。手加減はしない」

はああ、と口から声を発し一步を踏み込む。手をだらりとたらし脱力させる。腕を組むように手を交差させる。

「はああ」

刃を中央交差気味に斬りかかる。ヒュツという音が風を切りさく。その場にいない、回避した者の気配を背後に感じ、そのまま踊るように反転させる。その後数度斬りかかるも、刹那の間合いでもう一人は刃を見切っていく。

「くっ」

まるで自分が踊らされているかのように、あと一步攻撃が届かない。

「昨日の時と違い、一度も服にすらかすらない。」

「言ったはずだ・・ジャマヲスルナト」

ほぼ無音に近い踏み込み、呼吸をはずしたタイミング、彼女は遅れて反応するもののぎりぎりの所で相手の拳が左頬を直撃する。無意識下で膝を脱力させ重心を後方へずらす。直撃したものの少しは威力を和らげ、すかさず後方へ飛ぶ。攻撃した彼は手をぷらぷらとさせ、感触を確認している。

「ほんとに・・・なんの為に風斬氷華を・・・」

そういつてにらみ付けた先に、月明かりでぼんやりと照らされた煌が同じように鋭くさせた視線をぶつけてくる。

「教える必要はない」

煌は一昨日と同じ学校していのワイシャツとズボンの格好だが、1つ違うことはこの間と違い刻まれてはいない。そして彼女も一昨日の制服姿と違い、ラメにパープル色のボーター柄キャミソールチュニックに白のTシャツ、そして黒のクロップドパンツにスニーカーのスタイル。ラメが入っている分、少しの月明かりでも位置を用心に知る事ができる。

「ラメ柄は目立つんだよ」

先ほどとは一変、彼女は防戦にまわる。短いステップで間髪いれずに攻撃を繰り返す。

「このおお」

彼女は刃を外へ向け体を回転させる。すかさず煌は間合いをあげ、その攻撃範囲の外へとさがる。

「ふう」

体の回転をとめ、正面に煌を見据えると深く息を吐き呼吸を整える。吐き出した酸素を肺へ送り体内へ送り込む。

「絶対に霧が丘女学院の建物には・・あなたを近づけさせません」

「そこまでするってことは、風斬氷華ってのはよほど重要な・・・人・・いやなにか・・なんだろうな」

「絶対に・・・それが私の役目。・・・チャイルドとしての・・・」

・ ・ ・

「ぼそぼそと呟く彼女の言葉は、所々しか煌は聞き取れない。それでもはつきり聞き取れたのは、」

「チャイルド？」

その単語には聞き覚えがある。父親の資料にあつた『Heresy Child』という言葉、項目、何を示すのか今のままでは未知なモノ。しかし目の前の彼女がこの単語に近い言葉を発し、何かしら霧が丘女学院が・ ・ ・もしくはこの彼女が何かしら関わっている、一筋の光が射したような、一歩だけ母親に近づけるような気がした。ただ、父親の資料を追いかければ母親に繋がるという保障は何一つないのだが・ ・ ・。今はこれだけが唯一の手がかり。肝心の父親にこちらから連絡は出来ず、一方的な内容だけが定期的に届けられる。「なんだ、チャイルドてのは？」

煌のその言葉に、はっとして呟きを止める。煌のその問いには答えずゆらりと構えをとる。

「チャイルドって」

その次の言葉も彼女の攻撃により、飲み込まされた。先ほどよりも早い切り替えしに変則的な刃の動きも加わり、さきほどと別人の印象を与えられる。先ほどと同じく見切りつつ最小限の動きでよけるが、少しずつワイシャツに刃が届き始める。そして徐々に赤い液体が宙へ飛び散る。

フツと音もなくお互いが交差し背を向ける。煌の体には無数の浅い傷跡に、左の胸から右下に一筋の線がひかれ、そこから血が流れワイシャツを染めていく。彼女の方は露出している腕に無数の打撃跡、そして服の上からも数発の攻撃を当てられている。

「いてて」

お互い振り返り、煌は傷を確認し言葉を漏らした。

「あなた・ ・ ・何者」

「中学生」

「ぶざけないで」

真顔で冗談をいう煌に対し、彼女が声をあげる。

「私がつけた傷。浅く入った傷がなくなってる……」

左胸から右下につけられた傷以外、浅く入った部分の傷が煌の体から消え始めている。正確には傷が塞がって……。

「あなたの能力・幻覚催眠。だからその回復力はいりえない。多重能力も存在しない」

「昔から怪我の治りは早いだだけだ」

「……もしかしてあなたも……」

「志保……やめなさい」

「……はい……」

大人感の女性の声。校門の方から近づいてい来る人物が一人。近くまで来てようやくその人物の顔がはっきりする。

「なんでここにいるんだ？」

そこに現れたのは、父親の代わりに学園都市に連れてきて育ててくれた女性、玖留妹秋くるとせあきだった。

S 6 侵入者と守護人（後書き）

オランダ戦、日本は前線したと思います。

あ、これには関係ない話題ですけどね（笑）
書くネタが・・・

パラトラ終わったので、脳がお休みぎみです（笑）

S 7 父と秋と煌と志保と（前書き）

7話目ですが・・・ストックきれちゃった（笑）
これでこちらの更新はすこし遅れます。
活動報告に書いた通りです。

S 7 父と焯と志保と

「私がつけた傷。浅く入った傷がなくなってる……」

少女が焯につけた左胸から右下につけられた傷以外、浅く入った部分の傷が焯の体から消え始めている。正確には傷が塞がって……。
「あなたの能力・幻覚催眠。だからその回復力はありません。多重能力も存在しない」

「昔から怪我の治りは早いだだけだ」

「……もしかしてあなたも……」

「志保……やめなさい」

「……はい……」

大人感じの女性の声。校門の方から近づいてい来る人物が一人。近くまで来てようやくその人物の顔がはっきりする。

「なんでここにいるんだ？」

そこに現れたのは、父親の変わりに学園都市に連れてきて育ててくれた女性、玖留妹秋くるとせあきだった。

「どうしてあんたが……」

黒くウェーブがかかった髪を7：3に分け、グリーンのタートルネックノースリーブニットに黒のスリム仕様のスーツパンツ、ヒールの装いの彼女。秋は少女の肩に手を置く。無言で見つめあっていると、ふうと息を吐くと共に少女は刃を霧散させた。先ほどまでの殺気が嘘のように穏やかな雰囲気纏う。一方の焯は先ほどと変わらず警戒しているが、思考は錯乱しており実際には隙だらけであった。

「秋さん、どういうことですか」

明らかに声から動揺している事が明らかなのだが、それでも焯は震える声を必死で抑えていた。秋は少女・志保の肩から手を離し焯の前へと歩いていく。カツカツとヒールの音が妙に響く。

「焯、この街に来て4年……そしてあなたに資料を渡して3年。ついにここに来たのね」

微笑んで煌の肩に手を置いた。煌は無言のまま、秋の次言葉を待っている。

「風斬氷華・・・、これがあなたを繋ぐ鍵よ。さ、こちらに・・・
志保も」

「はい」

そういつて歩いていった先は、霧ヶ丘女学院の駐車場。そこに止まっているのは一台だけ。

「とりあえず移動しましょう」

機械音と同時に車のサイドランプが点滅する。ドアのガギの開閉の合図。

「ん？侵入者対策は？」

「ああ、大丈夫。もうロックもしたしデータは私が持っているから。彼女は私が居る間だけ見張っててもらってるのよ」

「ああ、そう」

先ほどまで戦っていた志保は、先ほどの鬼気とした殺気の面影がなほほど穏やかな雰囲気です。右後部座席へ座る。煌は助手席へと思ったが、秋の荷物ですとも座れる状況じゃなかったので、志保の反対の左後部座席へ座った。

「傷」

不意に話しかけられ隣の志保のほうに顔を向ける。

「もう傷が塞がってきている」

そう言われて彼女に一番深く刻まれた、左胸から右下についた痕は引つかかれたような赤い線になっていた。昔から多少の怪我はすぐに治るし、骨折したときもたいして時間も掛からず完治していて、医者も驚かせたこともあった。その回復力は、この学園都市に来てから極端に強くなった気がしていた。

「私は志保。二月志保よ。ふたつきしほよろしくね」

先ほどまである意味殺し合いに近いほどの戦いをしていた相手から、差し出された手に自分の手を重ね軽く握手をする。

「俺は一ノ瀬 煌。こちらこそ」

先ほどまで殺気ムンムンだったのに、微笑んで握手できるとはどんな神経なんだと少し疑ってしまふ。そんなやり取りの間に、秋は車を発進させ霧ヶ丘女学院を出発した。

「とりあえずどこから話せばいいかしら」

「全部・・・わかるように」

「そうね・・・。じゃあまずはあなたのお父さんの事」

「父さんの？」

「そう、お父さんが研究者だというのは知っているでしょ？」

「それは、一緒に住んでたときから自宅でなにか研究してましたから」

「私とあなたのお父さんは同僚だったのよ」

「同僚・・・」

「AIM拡散力場について、それから虚数学区についての研究を・・・ね」

AIM拡散力場、父親の資料にあったその単語についていろいろな書物を読んでいた。AIM・『An|Involuntary|Movement』の略で無自覚という意味。能力者が無自覚に発している微弱な力のフィールドの事。そしてこの学園都市に230万人分のAIM拡散力場が満ちている。それは学校の授業でも習う事である。

「AIM拡散力場についてはあなたも知っていると思うけど、能力者達が放つ無自覚で無意識に発生している微弱な力。個人個人が放つ拡散力場の相互干渉した場合どうなるのか。そんな研究をしていたわ」

煌はミラー越しに秋へ視線を投げる。彼女はゆっくりと、けれど淡々と話を続ける。

「そこにいつからいたのか・・・もともと存在していたのか・・・、そこに彼女がいたの。正確には彼女達・・・だけだね」

そこで一旦話を止め、河川敷のとある公園に車を駐車させた。ふう、と息を吐き話の続きをするより先に煌が質問を投げた。

「それが風斬氷華・・・なのか」

「ん〜おいしい。正解でもあるけど正解でもない・・・50点って所かしら」

「そうか」

ふふ、と秋は微笑み話を再開させる。

「彼女達は言ったわ。元々傍に居た・・・とね。でもそんなはずはなかった。なぜなら・・・彼女達は監視カメラに映っていないのだから」
煌の目が一際大きく開かれる。

「まさか・・・幽れ」

ゴスとわき腹に衝撃が走り、煌は呻く。それに苦笑いしながらも話を続けた。

「えーと、ま・まあ近いけどね。彼女達曰く・・・虚数学区の一部が人の形をしたモノだそうよ。そして虚数学区とはA I M拡散力場の集合体」

「A I Mの集合体・・・」

「彼女達は通常は私達には見えない世界に存在している。その世界はこの世界と薄い壁一枚で隔てている、というイメージでいいわ。

彼女達の世界の住人は、役割に応じた姿に変化するため、固定の存在は1人しかいない」

「その存在が・・・風斬？」

「ええ。その存在こそが風斬氷華のはずだったんだけど。彼女達がなぜこちらの世界に姿を現せたのか、役割に応じた姿に変化しないのかはわからないと言っていた。そしてその彼女達の内の一人が・・・煌、あなたのお母さんよ」

煌は血の気が引くのを感じた。自分の母親がまさか人間ではなく虚数学区と呼ばれるA I M拡散力場の一部。能力者達が発している無自覚な力が形どったもの。震える手を必死で押さえようと膝を強く掴む。それでも止まらぬ右手にそつと手が重ねられる。

「大丈夫。私もあなたと同じだから」

驚きと共にみた志保の顔は優しく微笑みを浮かべていた。

S7 父と秋と煌と志保と（後書き）

佐天さん推しなのに、新キャラ登場です（笑）
今後の展開は・・・どうしようw w

気軽に意見感想頂ければ嬉しいです

58 豪腕と紫電と（前書き）

お話しです。

とりあえず本編をどしどし

「風紀委員だ。通報があつたんだが……こりやどつちの為になんだ？」
シャツジメント

通報があつて現場に飛んできた……。だが、この河川敷では複数の地べたに這いつくばっている男と、その中心に返り血を浴びた男が一人。息もあまり乱しておらず制服のワイシャツに砂と赤い模様がついている。

「なんだ？つて顔してるな」

そう言つて土手から男の方へ降りていく。横目で見ていたが、降りてくる男の方へ向きを変える。

「俺は風紀委員第一七一支部、最上天成」
もがみてんせい

「ああ、そう」

男は興味なさげに表情も淡々としている。

「名前……は教えてくれなそう……だな」

右手をコキコキと鳴らしながら、男へと天成は近づく。

「ま、いいさ。一ノ瀬煌」

「てめえ……始めから」

煌はギリつと奥歯を鳴らし両手を握り締める。常人を超える脚力で一気に間合いを詰める。そこらのスキルアウト達なら、今横たわっている男達のようになるのだが天成は慌てることなく左腕を横になぎ払う。不意の反応に驚くと同時にすかさず腕を目に出す。

「な……」

「なんだ？ちよつと速い位で勝つた気なのか？」

天成の攻撃を受けた部分をさすりながら、天成を睨みつける。何度も左手を握つたり開いたりを繰り返す。しかし微妙にだが手が震えている。

「まあ、身体能力は高いが……お前の能力は幻覚催眠……だったか？能力を使うときに両目が紫電に輝く……、ついた異名は紫電

の王。」

「ふん、良く調べてるんだな」

「そらあな。ここ一週間で散々暴れてるって報告もきているしな」
ゴキつと両腕をならし筋肉を隆々とさせる。能力でもなくただの肉体を自分の限界へと引き上げる。並々ならぬ威圧感を感じているが、それでも煌は引かない。なぜなら自分は……

「来な……紫電の煌」

手でクイクイツと挑発する。

「へ、挑発とは……な」

天成へと踏み込み左足でハイキックを繰り出す。上体を蹴りと反対へ逸らし顔と足の間腕に腕を割り込ませる。直後に腕に衝撃を感じる。だが反対に逸らした分威力は和らぐ。が常人よりも身体反応速度が速い煌は、すぐさま右手で天成の左わき腹へ目掛け拳を繰り出す。

「……っ」

出来る限りの腹筋に力をいれてもノーガードの場所、そして煌の打撃の威力も合わさり一瞬苦痛を顔に表す。しかしすぐ様身体を腰から回転刺せ右の拳を顔に目掛け突き出す。

「っ……っ」

左手で右手を受け止めるも、煌の力でも止めることはできずそのまま左頬に左手ごと当てられる。

「この……馬鹿力」

「そらあ、なめてたお前が悪いんだよ」

「うるせえ」

そのまま煌は幻覚催眠を使う事無く自分の身体能力の身で天成を攻め立てる。しかし身体能力が優れていても、身体強化系能力者との戦闘の経験や、今までにしてきたケンカの経験、煌を上回る経験がこの戦いを有利にさせている。煌も天成に対し打撃は与えているが、決定打になるような一撃は与えられていない。それどころか天成の打たれ強さもあり、攻撃を当てた実感を持ってないでいた。そして逆に攻撃のタイミングに合わせ、攻撃を逆に当てられてしまう。

「なんなんだあんだ」

「なんでしよう」

睨みつける煌とは対照的に、少しおどけて答える天成。それに対し煌は少しイライラを募らせる。

「てかお前何者だ？俺がつけた打撃跡がもうなくなってるな」

「俺は・・・化け物・・・なんだとよ」

あの日、自分が普通とは違うと言う事を突きつけられた日・・・あの日から一週間が経っていた。

「はは・・・ははは」

車内で頭に手を添え煌は笑い出した。母親を捜し、父の道を辿り行き着いた先が・・・

「普通の人間じゃない・・・か。こりゃ、おかしい」

混乱する。ぐちゃぐちゃする。秋と志保の声はもはや煌には届いておらず、終わりの見えぬ自問自答を脳内で繰り返す。志保が触れた手を激しく振り落とし、必死に呼びかける秋の声にも反応をしめさない。

「彼女達の話では、体温は発火能力者のAIM、生体電気は発電能力者のAIMがそれぞれ役割を果たしている。だけど体内の構造については・・・どの能力者のAIMが関わりあるかわかっていないし、彼女は体内が空洞ということも知っていた」

「どうでもいい・・・そんなこと」

「彼女達は目の前で腕を叩き折った。私達は驚愕したけれど、中身は空洞・・・そしてすぐに再生が始まり元通りになった」

「もういい・・・聞きたくない」

「聞きなさい」

秋は声を荒げ言った。初めて彼女の激情的な声に煌は驚いたように

顔を秋へ向けた。煌の目は虚ろ、それでも秋をしつかりと見ている。「あなたは人間よ。れっきとした人。これはあらゆる装置にかけて検証したから間違いない。ただ彼女達の特性を少しだけ受け継いだだけ。自己再生能力と身体能力だけ・・・、だからあなたはまぎれもない人間なの。人体を構成する元素のみであなたの体は形作られているのよ」

「・・・」

煌は黙ったまま再び下を向いた。

「それに、あなたが生まれたのはまさに奇跡。彼女があなたのお父さんを愛し、その結果体内構造が生まれ子供を宿せる体になった。そしてあなたを生んで数年、彼女は消える事無くあなたと一緒に過ごした。それは本当に奇跡としか・・・」

「奇跡とかそんな事どうでもいい」

秋の言葉を煌が遮る。

「AIMの集合体が生んだことが奇跡？それは研究者の見解だろうが・・・」

ギリギリと握り締める手から血が滲む。

「人体の元素が一緒？化け物の子供は化け物にかわりない・・・」

「煌・・・何度も言うようだけど、あなたは・・・」

「じゃあ、あんたらは人間と認めている子供達に何をした？」

「え？」

秋はドキッとさせられた。確信をつかれた質問。どんなに言い繕っても変わらない事実。

「子供達に何をした？きつと肉体能力の解析という名目で、再生実験や能力限界の測定・・・やらないわけじゃないだろ」

その煌の言葉に、秋は出掛かった言葉を詰まらせた。非人道的をこえた行い、日に日に体を刻み傷の深さと再生速度の実験等数多く彼女も手伝ってきた。しかしそれに耐えかねて・・・

「でも秋さんは、私を助けてくれたわ」

そう言った志保に視線を向ける。儂げにそれでもやさしく微笑んで

いる。

「もう声を出すことも億劫になるくらいの実験、そんな時研究者達が離れた隙に私を連れて施設を離れたわ。自分が追われるかもしれないのに・・・それが3年前」

「あなたを引き取ってから1年後に・・・やっと彼女を助け出せたわ。そしてその1年後に施設で謎の爆発があつてね・・・。ようやく私達は表に出られるようになった。だから志保は霧女の生徒に、私は教員になったのよ」

ふう、と息をついた秋の顔には疲れが少し出ていた。煌は何も言わずしばらくした後、静かに車を降りた。二人には何の言葉もかけず、ふらふらと彼は歩いていった。どこへ行くのか自分でもわからぬまま・・・。

何度目かの打ち合いの末、煌の右拳を左に避けると同時に、天成は自分の右手を煌めがけて打ち出す。お互いの腕が交差する形となり、煌の力を利用し拳を煌の左頬へ打ち込んだ。鈍い音、顔の歪む音、軋み、自分の力を逆に利用され今までに味わったことの無いほどの衝撃と痛みを受け、体がくるくるとその場で一回・・・二回・・・。そして地面に頭を打ちつけ仰向けに横たわった。次に気づいたときには、天成は自分の隣に座っていた。

「脳震盪だろう。まだふらふらかもな」

体を起こそうとした煌は、天成の言うようにくらくたと体から力が抜けそのまま、また仰向けに倒れた。

「ははは・・・力がいらないねえし・・・」

震えながらも感触を確かめるように手を握りしめるが、結局途中で力尽き掌は開かれたまま。

「お前がここ最近なぜ暴れてたのかわからないが、一つだけ言つてやる。お前が自分を化け物と言つていたが、それが原因で暴れていたとしたなら・・・それは大きな間違いだ」

「間違い？」

「ああ、俺に・・・普通の人間に負けるような奴が化け物なはずねえよ」

その一言に、煌の何かが崩れるような・・・塊が溶け出すような、肩の力がふつと抜けるような気がした。顔の強張りも次第に緩み憑き物が落ちたような気分。

「化け物つて言いたいなら、俺を負かしてから言つんだな」

いてて、といいながら煌に受けた箇所や擦り傷の場所を確認する。

「ほんと・・・ぐうの音もでない。たしかに人間に勝てねえ化け物は化け物じゃない・・・な」

「人間が勝てねえ生き物だから、化け物なんだろうよ」

そういつて天成は立ち上がり服についた砂を叩く。だが叩く手も汚れているため、結局余計に汚れが増してしまったのだが。

「またなんかあったら、相手してやる。いつでも一七一支部に会いそういつて去る天成の後姿を目で追いかけた。今の自分には無い・・・大きなオーラを感じた。

「所で・・・俺とかこいつらとか・・・搬送とかしないのか。ほんとに風紀委員かよ」

そういつて煌は再び空を見上げた。閉鎖された学園都市、だがその都市も広い・・・という事を感じた煌だった。

「煌ちゃん？」

「うわあ」

突然目の前からの声に驚き後ろへ2、3歩下がる。よく見ればそこに佐天が立っていた。

「なんだよ、涙子か・・・びっくりさせんな」

「えー、何度も呼んだのにぶつぶつ言ってる煌ちゃんが悪いんだよ」

「このお」

「きゃー」

笑顔で逃げる佐天をこれまた笑顔で煌は追いかける。襲い掛かる手をひらりと佐天は交わしていく。

「ったく」

追いかけるのをやめ再び歩き出す煌の隣へ、佐天が寄ってくる。

「あれ？怒った？」

心配そうに覗き込んでくる佐天の表情がこれまたドストレートにかわいいと、素直に思った煌だったがあえて鼻頭を指でピンとはじく。
「痛っ」

そういつて鼻を指で撫でる。なんか無意識に頭を手でぐりぐりとしていたらしく、佐天のやめてという声ではっと我に帰る。

「ああ、悪い」

パチンと両頬を佐天の両手で挟まれる。ひよっとこのような口になるくらい挟まれ、その顔に満足したのか笑いながらその手を離す。しかえしとばかりに佐天の両頬を横に引っ張る。端から見たらじゃれ付いてるカップルである。

「いひゃい・・・いひゃいよ」

思い切りひっぱり指を離す。少し赤くなった頬をさすりながら、煌に軽く体を寄りかからせる。

「煌」

二人して声のした方へ振り向く。そこには霧ヶ丘女学院の制服を着た女子がこちらに歩いて来ている。

「志保、どうした？」

佐天は煌が女子を呼び捨てにしているのを聞いた事が無く、少しだけこの女子を憎いに近い感情を浮かべる。自分をその場に置き、女子の方へあるいて言った煌の背中を見ると少しだけ寂しさを感じた。
「今日、秋さんの誕生日って連絡したでしょう」

「あ・・・」

やべえといった表情を浮かべ顔に汗を浮かべるも、もちろんと取り繕うが志保にはバレバレだったため、頭をはたかれる。

「食材を買いに行くから手伝ってよ」

「あいよ」

「でも・・・」

志保は煌の後ろへ視線を投げる。そこには煌と同じ中学の制服を着た女子が一人、こちらをなんとも言えない表情で見ている。

「お、そうだ」

妙案が浮かんだように笑顔を浮かべ、佐天に近づき両手を肩に乗せる。

「え？」

徐々に煌の顔が佐天の顔に近づく。佐天にとってはスローモーションのような感覚。顔が熱くなっているのがわかるくらい、きつと真っ赤なんだろうなと思うと恥ずかしくなり余計に熱くなる。鼻の頭がかくつつくぎりぎりで煌の顔が止まる。

「涙子、お前料理できたよな」

「え？え・・・あ・・・うん、できるけど」

突拍子もない質問に一瞬頭が真っ白になった。

「志保決まりだ。こいつにも来てもらおう」

「私がかまわないけど・・・」

「なあに、一度会った事あるから大丈夫」

そう言っつて志保の方を向いた煌は、佐天の肩に手を置き自分に引き寄せる。急な事に恥ずかしさのあまり視線を下に向ける佐天だったが、その顔は・・・口元は緩く笑みを浮かべていた。

S 8 豪腕と紫電と（後書き）

とりあえずこれで、天成と煌の出会いが書けたかなと思います。もっと心理描写や表現と課題がたくさんですけど、この話で一段落しようかなとおもいます。

今後は戦闘よりも、アニメ版の裏側で佐天や志保との日常をメインにしようかなと。あとはシンフォニストの話の煌視点のを書いていこうかと。

ただ、ちよつと今別の話のアイデアが閃いたのでそつちを書きます。しばらくお休みになっちゃうかもしれないけど……。それでも応援宜しくね

S 9 何気ない日常（前書き）

えー戦闘とかないです（笑）

ほのぼの〜っとした感じを出していこうかと。

S 9 何気ない日常

「煌ちゃん」

下駄箱のところ呼びかけられ、煌が振り向いた先には鞆を持った佐天が立っていた。のそのそと上履きから靴に履き替え佐天と共に外に出る。心なしか佐天は嬉しそうに最近あった事を話し始める。最近買った服とか友達と遊びに行った事などいろいろと。

「１ついいか？」

今話した会話の中で何点かツツコミ所があつたが、その中でどうしてもツツコまずにはいられない部分。

「その・・・なんだ、初春つて子のスカートを捲るのは・・・」

「え・・・いやあ・・・あははは。だってちゃんと履いてるか気になるし」

「俺がいるときにして・・・つてえ」

少しにやけた表情を浮かべた煌の足を思い切り踏んづけた。煌は痛みで片足で跳ねる。

「ちょ・・・今の小指だぞ」

「にやにやしてる煌ちゃんが悪い」

そういつてぶいっとそっぽを向く。やれやれと思ひながら煌は頭を掻いた。

「じゃあ、しょうがない・・・涙子ので」

先ほどよりも強く涙子は同じ箇所を踏んづけた。煌は声にならない悲鳴をあげてうずくまる。靴の上から何度も足をさすった。意味はないのだが・・・人間とつさになるとよくわからなくなるものである。

「しょうがないってどう言う事？」

「え？怒る所そこかよ」

「え・・・あ・・・もうしらない！」

少し頬を赤らめながら煌の前を歩き出す。その姿を煌は呼び止めもせず、ただじーっと見つめている。すると暫くすると歩いていた佐天は立ち止まった。ものすごい形相で佐天は煌の方へ振り返る。

「あ・・・れ？」

視線の先には人影が無く、ただ道が奥へ続いていた。

「煌・・・ちゃん・・・」

怒らせてしまったのかと思い、佐天はしゅんと表情を曇らせる。先ほどのひと時と今のひと時の差に、気持ちが悪く落ち込む。

「るうーいーいーお」

背後からの突然の声に体をびくつかせる。そして

バサア・・・

「ひっ・・・」

佐天のスカートが、中が丸見えになるくらいに盛大に捲られる。重
力よってふわふわと舞い降りるスカート、一瞬何がどうなっ
たか頭の中が真っ白になった。

「ほほお・・・今時の中一はなかなか大胆な・・・いや少し背伸び
しすぎな気」

「こお・・・おお・・・ちゃああ・・・んんん!!」

ギギギと鈍く体を反転させ、般若のような表情の佐天。頬は少し赤
く目の端には涙を溜めている。そのあまりの殺気に身の危険を感じ、
脱兎の如く走り出す。

「まああてえええええ」

「あつはつは、待ちませーん。コレで初春ちゃんの気持ちわかった
でえ・ぐえ」

佐天の投げたバツクが頭を直撃する。結構な重さの筈だが、あれだ
・・・きつと今はリミッター解除なのだろう。ぶつけられた拍子に足
を躓かせた煌は地面に倒れた。体を仰向けに変えた瞬間目に飛び込
んできたのは、顔を真っ赤にさせ同じように足を躓かせ、自分の方
へ飛んできている佐天の姿・・・。

「つじお」

「きゃああ」

佐天の膝がちょうど煌の股間に当たっていた。声にならない悲鳴を
あげ、体をひくひくさせながら口から軽く泡を吹いている。

「えあ、あわわわ、えっと。ごめん、煌ちゃん」

佐天は慌てて膝蹴りした所をさする。しかしそこは煌の股間なわけ
で

「きゃあああ」

本日2発目の打撃に、煌の脳は意識を遮断した。

煌が意識を取り戻したのは先ほどの帰り道の近くにある小さなベン
チ。佐天がなんとか背負いここまで運んだらしい。目の前には佐天
の顔をその奥にはオレンジ色の空。頭はちょうど佐天の太ももの上
に。

「煌ちゃん・・・大丈夫？」

心配そうな顔で聞いてきた佐天に笑って応える。

「ああ、さすがにここは鍛えてないからな」

「あはは〜下ネタね」

煌の答えに佐天は乾いた笑いをお返しした。

「よいしょっと」

膝枕の状態から体を起こし、佐天の隣に座りなおす。大きな伸びを
して体を活動体勢へと導く。

「もう大丈夫なの・・・その・・・」

「痛みはないから大丈夫だろ」

「なら・・・よかった」

「よし、甘いもん食べいくか」

「痛っ」

煌は立ち上がり佐天の頭を鷲づかみにする。ぐいぐいと2度3度と佐天を横に揺らす。

「や・・・やめてよ煌ちゃん」

そうは言っても佐天の表情は嬉しそうに笑っているが、煌からはその表情は見えていない。

「涙子は何が食べたい？」

「んー」

下唇に人差し指を当てて考え込む。「あっ」と閃いたように煌の手を握って引つ張り歩き出す。

「お、決まったか？」

「この間食べ損ねたパフエ・・・それにする」

「はいはい。じゃ、その店まで競争だ。負けた方のおごり」

「ええ!？」

そう言って駆け出す煌だが、つないだ手は離さない。佐天も離れない様に力を込める。

「煌ちゃん、店の場所知ってるの?」

「あ・・・」

「なら私の勝ちだね」

そう言つて今度は逆に佐天が煌を追い抜く。それでもお互い手を離す事無く、街中を走つていく。

季節はもうすぐ7月。

佐天が超能力者（LEVEL5）と出会いを果たすのはもう少し先の話……。

S 9 何気ない日常（後書き）

なんか、当初の予定から路線変更気味かもw w

戦闘はシンフォニストとマスキドライダーでしてるので、

しばらくはほのぼのと甘酸っぱさを出せれば言いなあと思っています。

S10 とある過去の爆発事故（前書き）

マスクライダーとハルシネーションはリンクしてるので
同じ話になっちゃってますが、投稿します。

S10 とある過去の爆発事故

数年前のとある研究施設

「大変だ！実験対象^{サンプル}1号が」

多数の機械が詰め込まれた室内で、複数のモニタを見ていた白衣を着た男性が声を上げた。モニタには通路、機材が取りつけられた診察台がある部屋、そして簡易ベットに簡易トイレが備わった部屋等、いくつも映し出されていた。その中の一つ、簡易ベットのある部屋をが映し出されたモニタを見た他の者達も慌て始める。

「どうした？いつの間に……」

ベットの上にいるはずの……がない。タオルケットのようなものが、ベットの上に乱暴に投げられている。研究員がモニタを切り替え、施設内を映し出すの彼らの求めるモノは見つからないらしい。通信マイクで所内各員に連絡を取るも、徐々に反応する声体数が減っていく。呼びかけにも反応せずスピーカーからは無音が響く。

「まずい。今1号がいなくなったら……研究が……。戦技研へのデータが」

ツシユと静かにこの部屋のドアが中央から左右にスライドしていく。その音にゆっくりと研究員たちが振りかえる。首を左へ傾け目が大きく見開いた全身から血が噴出している幼さを残した青年が立っている。ゆらりゆらりとゆっくり歩みを進め室内へ入ってくる。その顔はまさに無表情、寒気を覚える不気味さ。

「い、1号……。だめじゃないか部屋にぎゃっ」

青年に歩み寄ってきた研究員の一人を殴り飛ばす。体を反転させ壁に顔を打ちつける。ぽたぽたと床に赤い雫がたれていく。ぴたぴたと足を流れている赤い液体が床に足の後を残す。

「ひぎゃ」

顔を打ち付けた男の後頭部を掴み、壁に押し付けたままずり下ろす。赤い液体が壁に線を引く。手を離すとポトッと落ちる。その頭を数回ガシガシと足蹴にする。

「ひっ」

青年は蹴るのをやめ、モニタの前に座っている男の方へ振り向く。ゆっくりと振り向いた青年の顔に恐怖し、研究員は椅子から滑り落ちる。しかしそこに彼の姿は無く、床にお尻を滑らせながら後退する研究員の背中に何かが当たる。そう、壁までは距離があるはずだが。

「が……。あだだだ」

上から頭を鷲づかみにされ無理やり引き上げられる。

「学習装置は……。どこだ？」

「ひ……。ひいいい」

「俺についてのデータ、研究結果およびその目的、情報処理能力に関する全てを準備しろ」

そう言つて悲鳴を上げ震える男を無理やり引きずりながら部屋を出る。入ってきた時に噴出していた血は、いつの間にか消え去り白く透き通つた肌が露わになる。患者衣に染み込んだ血だけは変わらずだが。

「フロアD・・・フロアDだ」

引きずる男は声を絞り出すも、床に無残にも転がっている他の研究員の姿を見て表情を思考を強張らせた。

フロアD・・・この施設でよく青年が連れて行かれるフロア。窓の無い施設内で1日という概念を感じ取るのは難しい。時計すらないこの世界では、寝て起きたら次の日と青年は考えるようにしていた。もう何日と言う概念は無い・・・ここにきた時は小さかつた男の子は、やがて少年を過ぎ、青年と呼ばれるくらいの背丈に体つき、どのくらいの時間がたつたのか少年にはわからない。世間の子供達や人間たちが行う誕生日など少年には無縁だつたからだ。

どのくらいの時間、彼の肉体に刃をいれ頭の分析に生体刺激、あらゆる実験を繰り返されてきた。やっと青年は自身の力を理解する。この施設の人間と自分が違うことを。そしてここ数日・・・彼はある住人に誘われ・・・自分の意味の破片を知つた。

「さあ・・・俺が求めるデータを学習装置にいれる」

「わ・・・わかつた」

引きずられた研究員は震える手で、学習装置に必要なデータを入力している。パネルに映し出されるバーが情報転送状況を表している。研究されていたデータに青年が求める情報を順番に入れていく。背後に感じる威圧、殺気に研究員は早く終わりにしたいという気持ち

で一杯だった。

「お・・終わった。あとはリングを頭に装着・・装着し、このス
イッチを押せば始まる」

研究員は簡単に操作の説明をする。一刻も早く逃げ出したいが、体
が思うように動けない。

「所要時間は？」

「おそらく・・・データ量が膨大なため・・・10分くらい・・だ
ろう」

「そうか」

青年は研究員に向かって手を突き刺す。指の刺さった部分から赤い
染みが面積を広がらせる。

「ぎいあ・・・いった・い・・なにを」

「10分・・・変な事をしないように動きを・・・ね」

研究員の腕を掴み、ゴキッと鈍い音を慣らし両肩の関節をはずす。

「ぎゃああ」と悲鳴をあげる研究員を、力任せに蹴り飛ばし青年を
学習装置のリングを頭にセットする。研究員は痛みで起き上がる事
もできず呻いている。

ジュピッ

青年はパネルのボタンを押す。機械が音を鳴らし稼動して行く。診
察台のようなカプセルのような台の中に入り、仰向けに寝る。ヘル
メットのようなリングが、目の位置くらいまで深々とかぶさって
くる。

ギユル・ギユルギユルギユル
ギユイイイイイ
キユキユキイイイ

12分後

ブシュー
カシャン

すべての学習が終了した装置は動きを止める。深々とかぶさったり
ングをはずし青年は体を起こす。ポーっとしている脳をはっきりさ
せるように顔を左右に振る。目に入るのはうずくまって倒れている
研究員。床には血だまりができている。

「ふふふ・・・ふははははは」

静まり返ったこの部屋に青年の笑い声が響き渡る。

「時を統べる俺を真似事など・・・ふはははは。くだらない・・・こ
んな事のために・・・生み出されたのか・・・俺は・・・」

歪んだ笑みを浮かべて彼は立ち上がった。そしてゆっくりと歩き出
しこの部屋を出ていった。

「Heresy Child・・・俺と同じ・・・存在・・・か」

数日後

とあるマンションの一室。PCのモニタを眺めながら、一人の女性がコーヒを一口飲む。

「これって・・・」

「秋さん、どうしたの？」

シャワーを浴びてきたのか、タオルで髪を拭きながら少女は質問する。

「表立って公表されて無いけど、いくつかの研究施設で爆発事故が起こつたらしい」

「ニュースになってない？」

「そうよ。そのうちの1つが障害補助機器開発機構」

「それって私のいた？」

「そう。私とあなたがいた研究所ラボよ」

「でも・・・これで、少しは自由にできる？」

「そうね・・・。少し調査もしたいし、ちょっとはコネもあるから、来週から志保は霧ヶ丘女学院へ行きなさい」

「学校？」

「ええ、あそこなら知り合いもいるし、裏情報も・・・ね」

そう言つて秋は志保へウインクをする。ただ秋はこの研究施設の爆発事故に、ただならぬ何かを感じていた。

そのリストの中に戦闘兵器開発技術研究所、通称戦技研の名前が載っていた。

S10 とある過去の爆発事故（後書き）

て、手抜きじゃないもん。

いえ、手抜きですね。

でもどうしても書かないと今後の話につなげられないので、許して
ね

S 1 1 裏 7月16日(前書き)

これで一旦完結扱いにします。

シンフォニストのサイドストーリーとして、天成と煌の出会いを書けたので個人的に満足しちゃいました。

S 1 1 裏 7 月 1 6 日

7 月 1 6 日

季節はすっかり夏。教室の中は蒸し暑く、窓を開けていてもあまり効果がない。はずなのが普通の学校生活なのだが、ここは科学が進んだ学園都市。そんな事にはならず、どの学校にも冷暖房の空調設備が完備されている。そのため学園都市の学生達はどの季節でも、快適な学校生活をエンジョイすることができる。

そしてもうすぐ夏休み。学生の気分も浮き足立ってきている。能力開発に勉強にいそしみつつ、恋愛等学生はやるものがたくさんある。

だ・が・

本日は嬉し恥かしの身体検査システムスキャンの日である。どんなレベルの能力者も少なからず、面倒くさいと感じている。どこかの中学のプールではドツカンドツカンと大きな水が壁のように立ち昇っている時に、煌は教室の自分の机に突っ伏していた。

「はぁぁ……終わった終わった」

全校生徒が順番にそれぞれの検査の行われる部屋に並ぶ。今回も能力でレベル3という事を教師に納得させた煌は、誰もいない教室へ一番最後に戻ってきた。じゃんけん出席番号の遅い順で検査に行く事になり、出席番号が1番の煌が最後に帰ってきた。

柵川中学校の校庭はそんなに広くは無いが、校庭での検査が必要な能力者の中で大能力者《レベル4》はいないため、特に困らない広さである。この柵川中学は無能力者《レベル0》の割合が比較的高

く、煌のような強能力者《レベル3》は少ない。実際、煌の能力がどのレベルにあるのかは不明である。なぜなら彼はずっと自身の能力で、教師達にレベル3と納得させて来ていたから……。

「そういえば、涙子からメールきてたな…えつと」

煌は先ほど検査を並んで待っている間に、に携帯が震えたのを思い出した。表のサブウィンドウに『佐天涙子』の表示があったが、検査中に確認するわけにも行かずそのまま放置していた。のそのそと携帯を開く。

件名：煌ちゃんお疲れ

今日は初春と一緒に遊びに言ってくるね

ちなみに今日の初春のパンツは……それじゃあまたね

（初春さん……また今日も捲られたのか。涙子の友達になったのが運の付きだね）

何度か涙子と帰る時に話した事があるため、顔は見知った中ではある彼女に同情してしまう。なぜならいつもかかってにパンツを見せびらかされてしまうためだ。男として嬉しいのだが、決まって煌がいるときには佐天はめくらない。煌は密かに待っているのだが、いつも何もせずそのまま家路に着く。以前抗議した事があるが、後が怖かったので二度とするまいと煌は誓っていた。

「へつくしゅん」

「佐天さん風邪ですか？」

「そんなことないんだけど」

初春が心配そうに覗き込むも、佐天は鼻をすすり大丈夫と強く言う。もうすぐ夏休みのため、ここで風邪など引いていられないと感じているのは内緒である。

「初春、どこで待ち合わせにしたの？」

「えっとここを曲がった所にあるファミレスなんですけど」

道を曲がった少し先に『Joseph's』という看板が目に入る。初春は「あそこです」と言って、佐天の手を引っ張る力が強まる。道路に面している側はガラスで中が見えるようになっていて。それなりに広く、学生や社会人の姿がちらほら見える。そしてこの第7学区の学生なら誰でも知っている制服を着た女子二人が、抱き合っている。6人がけくらの席のはずだが、ツインテールの少女が、肩くらいの長さの少女の上に乗っかかりもぞもぞしている。乗っかられてる少女は啞然とした表情をしているが、ツインテールの少女は外側に顔が向いていないため、どのような恍惚な表情をしているかまでは見えなかった。

「さ、佐天さん」

「ほんと、どんなお嬢様なんだか……ってえ？」

初春は佐天の半そでを二度引っ張る。振り向くと初春はなにやら店内に目を向けている。同じようにその先に視線をやると……。

「え………っつ」

「……、」

あまりの出来事に言葉を失うが、それは紛れも無い学園都市屈指の

名門校、常盤台中学の制服を着ている少女が2人絡み合っていた。ツインタールの少女に乗っかられ抱きつかれた少女は、外にいる二人と視線が重なった

佐天に対し適当に返事を書いた煌は、校門の所で大きく伸びをする。まだ校内で生徒達の声が聞こえているその場所を後にした。

チャーララーチャーララーチャーララッラン

軽快でファンシーな曲調の音楽が流れる。こんな設定自分はしないのだが、この間佐天にいじられていたのを思い出した。半分力が抜けかけたが、携帯の着信元を見た煌はすぐに通話ボタンを押す。

「はい、煌ですよ」

「ちよつと手伝って欲しいんだが」

「天成さんの依頼なら仕方ないですねえ」

「助かるよ。スキルアウトのとあるグループを壊滅させる」

「その後警備員アンチスキルへ引き渡し……ですか？」

「正解。ホワイトシュリンプってやつらだ。最近やつらの暴挙が目立つとの事だ。警備員の上のおっさんからの依頼だから断りづらいしな」

「じゃ、三人でちゃちゃつと終わりにしちゃいましょう」

「ああ、時間は今日の21時だ。やつらの集まりがある」

「じゃあ21時に」

通話を終了した携帯を制服のズボンのポケットにしまい歩きます。だがすぐに歩みを止めた。

いつからそこにいたのか、煌の気づかぬうちに少し後方に感じる人の気配。はたまた存在していたのか……ただはつきりしていることは、今自分の後方に確実にいるということだ。

「なにか用でも？」

煌は立ち止まったまま振り返らず気配に問いかける。気配は距離を詰めることも、動く動作も感じさせず煌の肩に手が掛かる。その瞬間、肩の手を払うように体を反転させる。だが視線の先にはただの奥へと続く道に、住宅が並んだいつもの風景。

「そんなに警戒するなよ」

声が聞こえる左のほうへ顔だけを向ける。歩道と車道の間にあるガードパイプに体をより掛かかり、一人の色白の青年がこちらへ視線を向けている。色白の優男というのが似合う風貌をしている。彼はふわっと体をパイプから離しこちらへゆっくりと歩いてくる。見透かしているような飄々とした表情の彼に、不気味さを感じた煌は嫌な汗を背中に感じた。敵意も殺意も感じず、それが煌に余計に不気味さを感じさせていた。

「僕達は同じ者同士、警戒する必要はないんだよ」

優しく諭すように彼は言う。

「どういう意味だ？」

「それは、君が一番知っているじゃないか……自分の事だろう」

にやりと笑う彼に対し、煌は初めて敵意を剥き出す。煌の敵意を感じた青年は、歩みをとめその場に立ち止まる。それが煌の敵意の間

合い、これ以上の侵攻は迎撃を意味する。だが一呼吸をおいた直後彼は一歩歩みを進める。その直後に煌は地面を蹴り相手に詰め寄る。煌はその身体的特殊な特徴があるため、常人よりも速い反射速度に脚力で動き出したはず・・・なのだが、敵意を吐き出す相手がいっの間にか居ない。そう・・・目はそこにすでに居ないことを知っていた、だが目から脳への伝達のラグが一瞬の時間差を作る。目の前に彼はいない。そう気配は自分の後方ということを感じている。

「このやるお」

右足での上段まわし蹴りを放つも、彼は足の甲の部分を左手で受け止める。その際に一切微動だせず・・・だ。

「な……、」

「君と同じって言ったけど、僕の方が上位体……だから」
「っ……!」

すぐさま足を降ろし左手を振りかぶると、その左腕を後ろから掴まれる。ギリギリと骨が軋むくらいの握力で握られるが、煌が左手に力を入れると簡単に放された為、勢い余ってよろける。

「テレポーター空間移動能力者か……」

「それとは次元が違う。俺は時間を統べるのさ」

「時間を・・・統べる？」

「そんな事より俺たちと手を組まないか？」

「俺・・・た・ち？」

複数形の言葉に煌は疑問を浮かべる。

「どうだい？この街の科学者も住民もすべて生まれ変わらせるのさ」

「生まれ変わらせる？」

「そうさ、まずはすべて掃除しなければならない。だから君にはそれを手伝って欲しい」

笑って言う彼に対し、煌が答える言葉は一つ。既に決まっている。

いい思い出も悪い思い出も、この街で過ごしてきた日々、人、それらは煌の中で大切なものになっていた。自分の生まれも気にせず受け止められた事で、煌は毎日に光が差した。外での暮らしより学園都市で暮らしてきた生活の方が、充実し思い出も多い。だからこそ……

「断る」

その言葉に青年は眉をぴくつと動かす。その表情から笑みは消え、悪魔のようにどす黒い表情に変わる。

「そうかい。なら後悔するがいい……どいつもこいつも。すでに始まっているのだからなあ」

その言葉を残し彼はその場から消えた。景色を曇気楼のようにゆらりゆらりと動かし、彼は少しずつ体を透かしていった。そのゆらぎが消えると同時に青年の姿も消えていた。

先ほどの青年の言葉、すでにこの学園都市で何かが始まっているということを知った。

数カ月後・・・同一者邂逅という、自分のドッペルゲンガーと遭遇するという事件が、学園都市で発生した。

S 1 1 裏 7月16日(後書き)

中途半端な感じですけど、天成と煌の出会い、そして謎の敵との出
会いを書けたので。

落ち着いたらこちらもまた再開するかもしれません。

別の作品をこれからも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182/>

とある科学の双瞳の幻～ハルシネーション～

2010年10月11日23時02分発行